

# The Japan Dickens Fellowship

Department of English Literature  
Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University  
17-24 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980-8576  
Tel & Fax +81(0)22-795-5961(Department Office)  
E-mail : hara\_ei@sal.tohoku.ac.jp  
http://www.soc.nii.ac.jp/dickens/



2006年6月21日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

## ニューズレター

2006年度の春季大会は6月10日(土)、武井暁子氏のお世話で山口大学にて開催されました。やや遠隔地での開催でしたが、50名を超える聴衆が集まり、充実した内容の3つの講演に熱心に耳を傾けました。以下、簡単に内容をご報告いたします。

### 春季大会

支部長挨拶では、日本支部としての大事業である『ディケンズ鑑賞大事典』(仮称)がようやく初校の段階に入ったこと、ディケンズ・ハウス博物館への寄付の件等が報告されました。

ついで、山口大学教育学部長の吉田一成先生から歓迎のご挨拶をいただきました。

講演1 司会 小野寺 進(弘前大学)

寺内 孝「ディケンズはキャサリンと和解できたか？」

寺内氏の講演は、ディケンズとキャサリンの別居から、エレン・ターナンとの関係、ディケンズの死に至るまでの経過を詳細にたどり、ディケンズとキャサリンが和解できたのかを探ったものでした。長年の詳細なりサーチに裏づけられた論の展開はたいへん説得力のあるもので、作家の晩年の心理の動きを手取るように明らかにしてくれました。

講演2 司会 玉井 史絵(同志社大学)

梅 正行(中京大学)「チャールズ・ディケンズの家、サマセット・モームの家」

梅氏の講演は、「家は住人の内面の投影であるはずながら、作家が作中人物に与える家は、ときに住人の内面と距離がある」ということを、18世紀のデフォーから、ディケンズ、モーム、さらには現代のインド系カリブ海作家V.S. ナイポールに至るまでを例に取り上げて縦横に論じたものでした。おそらく未完と思われる論考でしたが、洞察と刺激にあふれた内容は、完成版への期待を大いに高めるものでした。

特別講演 司会 西條 隆雄(甲南大学)

Dr Tony Williams, 'Dickens and "The Moving Age"'

followed by a reading from chapter 9 of *Great Expectations*

今回の特別講演では、ディケンズ・フェロウシップのロンドン本部でJoint Honorary General Secretaryを務めるトニー・ウィリアムズ氏を迎えました。めったに外国に出ることがないというウィリアムズ氏を極東の日本まで来る気にさせたのは、西條前支部長の手腕、というよりもお人柄によるのでしょう。講演の内容は、ディケンズが生きた時代が、さまざまな面でいかに「変化と動き」に満ちた時代であったかを詳細に論じたものでした。ウィリアムズ氏は、*Dombey and Son*の中にあるドンビー氏の鉄道旅行の描写が、人類が初めて経験するスピードの世界を見事に描ききったものであることを強調され、私たち聴衆もまた、ディケンズが人類史の新しい局面に出現した稀代の天才であることを再確認しました。ハンドアウトを読み上げてくださいましたが、蒸気機関車の轟進する様子がありありと眼前に浮かぶようすばらしい朗読でした。講演後の朗読では、ピップがミス・ハヴィシャム邸訪問の様子を報告させられ、その後、ジョーに「ほら話」だったと告白する場面が取り上げられました。ジョーの精神の気高さ、優しさがしみじみと感じられるもので、これまたすばらしいパフォーマンスでした。

懇親会

大会会場の山口大学学生会館からマイクロバスで湯田温泉のホテル・ニュータナカに移動しての懇親会は、会員の他に非会員の山口大学関係者等40名近い参加者がありました。いつものようにフェロウシップ精神が大いに発揮

され、楽しくにぎやかな時間があっという間に過ぎました。その後、場所を移しての二次会にも20名近くが参加、密度の濃い会話が続きしました。

大会翌日には、武井さんのご手配により、オプション・ツアーとしてジャンボタクシーでの秋吉台・秋芳洞観光が生まれ、支部長夫妻、トニー・ウィリアムズ氏等8名が参加し、奇観絶景を満喫しました。

大会の前後にはのんびりと温泉につかることができるという希有のロケーションでの開催でしたが、今回の大会が素晴らしいものとなったのは、何といても武井暁子さんの行き届いたお世話のおかげです。武井さんのご尽力に心から感謝申し上げます。

#### 諸報告

- (1) 『年報』への論文原稿（フロッピー・ディスクおよび清書原稿）は原稿用紙35枚以内、締切は6月30日（必着）です。（支部長宛に、可能なかぎり電子メールで、お送りください）
- (2) 記事・ニュースの締切は8月10日とします（これも支部長宛にお送りください）。
- (3) 『年報』に掲載いたしますので皆様の業績報告を随時メール・郵便等により支部長までお寄せください。また、日本におけるディケンズ研究書誌を作成するため、会員（および会員以外の方の）2005年度の著書・論文等の報告にもご協力をお願いいたします。できれば以下のウェブフォームでご報告ください。

<http://form1.fc2.com/form/?id=31664>

または松岡光治理事宛 (e-mail: mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp)に御報告いただければ幸いです。

#### 会費納入のお願い

本日現在で会費未納の方には郵便振替用紙を同封しましたので、新年度会費6,000円をご納入ください。会費が納入されませんと、*The Dickensian*をお送りできない場合がございます。ご理解、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

### 2006年度秋季総会予告および研究発表募集

2006年度秋季総会は、10月7日（土）に東北大学（仙台市）で開催されます。研究発表を募集しますので、ご希望の方は、下記要領でふるってご応募ください。

- 研究発表の内容要旨を400字程度にまとめたものを、8月10日までに、下記宛電子メールでお送りください。

[hara\\_ei@sal.tohoku.ac.jp](mailto:hara_ei@sal.tohoku.ac.jp)

- ※ 電子メールが利用できない方は事務局宛郵送でかまいません。
- 応募者多数の場合には、やむを得ずお断りする場合がありますので、あらかじめご承知おきください。

10月8日（日）・9日（月・祝日）には、「シェイクスピア学会」が同じ仙台の東北学院大学で開催されますので、ホテル等が多少混み合うことが予想されます。宿泊のお世話は行いませんので、参加予定の方はご自分で早めにご予約ください。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部事務局  
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1  
東北大学大学院文学研究科 英文学研究室内  
電子メール： [hara\\_ei@sal.tohoku.ac.jp](mailto:hara_ei@sal.tohoku.ac.jp)  
電話・ファクス：022-795-5961（英文学研究室助手）  
022-795-5959（原支部長直通）